

## 気づく心、支える力

### 子どもたちが教えてくれる思いやりのかたち

校長 田中 一秀

2学期が始まり、早くも1か月が過ぎました。まだ夏の余韻を感じる暑さの中、街にはハロウィンの装飾が並びはじめ、澄んだ空と爽やかな風が秋の訪れを告げています。季節の移ろいを肌で感じる日々の中で、子どもたちと共に過ごす時間の尊さを、改めて実感しています。

朝、校長室にいと、校庭から駅伝大会に向けた練習の声が聞こえてきます。窓の外には、自分の限界に挑みながら懸命に走る生徒の姿、そして、その生徒を励まし、温かく見守る教職員の姿があります。生徒の努力に頼もしさと誇らしさを感じるとともに、指導にあたる教職員、そして朝の練習に送り出してくださる保護者の皆様に、心から感謝の気持ちが湧いてきます。こうした営みが、本太中の日常にしっかりと根づいています。

9月上旬には、地域の多くの事業所の皆様のご協力のもと、2年生が「未来くるワーク体験」を行いました。生徒たちは、人との出会いや地域での学びを通して、勤労観や職業観を育み、学ぶことの意味を深く考えることができました。社会の中で自分の役割を見つけ、他者と関わりながら自分の考えを持つことの大切さを学ぶ、かけがえのない経験となりました。ご協力いただいた事業所の皆様には、生徒の未来を育む貴重な機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。

さて、2学期開始早々の暑い休日、本校の生徒が部活動の帰り道で、体調不良で座り込んでいる方に気づき、すぐに学校へ戻って職員に知らせてくれました。職員がその方を安全にご自宅まで送り届けることができたのは、その生徒の迅速で思いやりのある行動のおかげです。人の痛みに気づく感性、そしてそれを行動に移す勇氣。それは「誰かのために何かをしたい」という純粋な思いから生まれるものです。私は、その思いこそが、人と人をつなぎ、社会をあたたくする力になると信じています。今回の生徒の行動は、「人として大切なこと」を体現してくれたものであり、心から拍手を送りたいと思います。

こうした行動が生まれる背景には、「自分は認められている」「自分には意味がある」と感じられる日々の経験の積み重ねがあります。人は、他者からの承認を通じて安心感を得て、自分らしく生きる力を育てていきます。子どもたちは、仲間や教職員、保護者からの温かなまなざしや言葉によって、自己肯定感を育て、「自分を信じて歩む力」を身につけていきます。その力は、目に見える成果だけでなく、日々の小さな選択や行動の中にこそ表れます。

教育の本質は、子どもを「できる・できない」で評価することではなく、その子がその子らしく生きることを支えることにあります。たとえ失敗しても、努力したこと、考えたこと、感じたことを認める言葉がけが、子どもの心を育てます。子どもたちが自分の存在に価値を見出し、未来に希望を持てるようにすることは、私たち大人の使命であり、社会全体の責任であると感じています。

私は、社会はすべての人が「自分は大切にされている」と感じられるものでなければならないと考えています。そのためにも、子どもたちの心に寄り添い、未来を信じて共に歩むことが、私たち大人の使命です。子どもへの接し方の正解は、子どもしか持っていません。子どもたちの可能性を信じ、支え続けることで、社会はより豊かで、あたたかいものになっていく。私はそのように確信しています。